

威興にて武装解除を受け、昭和二十年九月末、興南港よりソ連船にてウラジオに連行され、アルチョム収容所にて炭鉱労働に従事。

昭和二十二年四月末、ナホトカに移動、同年四月末ないし五月初め舞鶴港に帰還。

東洋綿花株式会社に復職。名古屋、大阪、四国の各店に勤務。昭和五十九年定年退職。

昭和六十年より帰国日本人孤児の日本語教師を担当。さらに中国人向け日本語学校二校の非常勤日本語教師を八年間、愛知県豊明市受入れの中国人技術研修生の日本語教師を七年間にわたってそれぞれ勤める。

全抑協愛知県支部の設立と共に入会。

平成十二年十一月、愛知県の「シベリアの労苦を語り継ぐ集い」に、「シベリア抑留アルチョムの実態」と題してトークを行った。

平成十三年、同支部改選において支部理事に就任、書記として会報の編集を担当中である。

(愛知県 沢野 良弘)

わが青春時代

(ウラルを越えてシベリア抑留の記録)

三重県 宇平 博

三重県飯南郡檀田村安楽四〇番地、大正十四(一九二五)年五月四日、出生。昭和十七(一九四二)年三月、三重県立宇治山田中学校四年修了。昭和十七年四月、陸軍予科士官学校入校。昭和二十年三月陸軍航空士官学校卒業、航空司偵偵察学生。昭和二十年四月、六月、水戸陸軍航空通信学校入校。五月中旬頃、航法航空通信実修訓練のため双練にて新潟飛行場に向かい一泊、再び訓練実施後水戸飛行場に着陸し掩体に収容作業中、ロッキードグラマン戦闘機が急降下、敵操縦士の顔がはっきり見え、機銃掃射の態勢に入ったので側溝に伏せたが、弾道が十メートル近辺で走って行った。これが第一回の命拾いの一コマです。

昭和二十年六月三十日、満州第二航空軍第四二教育

飛行隊（司偵）配属の命を受け三十九人の偵察学生は水戸を出発、陸路出発港に向かった。七月一日付で陸軍少尉に任官、空爆地の岡山、広島を通り下関、長門市、萩市を経由して須佐港に到着した。地元の方に歓待を受け須佐小学校で仮眠し、七月三日早暁、海防艦護衛のもと釜山プックに向かつて出港した。釜山で英気を養い、七月五日特急列車にて京城（ソウル）、平壤（ピョンヤン）、新義州を経て新京（長春）にて下車し、軍司令部に申告後ハルピンを経て任地黒龍江省衛門屯飛行場に七月七日到着した。既に同期の司偵操縦学生二十八人が四月より赴任し訓練を行っていた。衛門屯到着よりソ連軍来襲の八月九日までの約一カ月は学習と実地訓練に明け暮れ、あつという間に経過しました。印象に残ったのは、第四軍司令官上村中将閣下の官邸のジンギスカン料理の歓迎パーティと、外出時の軍人会館での中国料理を楽しんだ事です。

衛門屯撤収―武装解除―牡丹江まで

日ソ中立条約を破棄し、八月九日早暁よりのソ連軍の侵攻作戦は無慈悲なものでした。大本営より満州に

展開している将校学生並びに士官候補生は、速やかに陸軍航空士官学校に帰還し本土決戦に備えよとの命令が下達され、操縦学生は拉林飛行場ラリンより内地へ（一部の学生を除く）帰還しました。偵察学生は部隊長の判断で地上勤務部隊と行動を共にし、陸路帰国の道をとるとの事でした。

ソ連軍は九日未明の空襲以来、満州全域にわたり進攻して参り、一刻の猶予もできず、ようやく十三日に衛門屯を出発し有蓋貨車でハルピンに向かいましたが、ハルピン手前で豪雨のため列車がストップしました。十五日午後、終戦の詔勅が下ったとの情報が伝達され、悲観の極みでした。やっと列車が運行しハルピン駅に着きましたが、既にソ連軍が進攻しており、やむなくハルピン飛行場（孫家）に徒歩で向かいました。たしか二、三日滞在し入浴や給食を受けゆつたりしておりましたが、突然阿城連隊に転進せよとの命令が出て、泥濘の中を苦勞して行軍をしました。

阿城連隊に到着後武装解除の式があり、愛刀もソ連軍トラックにバラ積みされ、どこかへ運び去りまし

た。そのうちにソ連軍より阿城駅に列車が待機しており、ウラジオストックより日本へ帰還させるとの話があり、喜んで無蓋貨車に飛び乗りました。一時間くらいたつて河布呂^{アブロコニ}駅で列車が正面衝突したため、これ以上進めないで鉄路を徒歩で牡丹江まで行軍せよとの命令が下達されました。やむなく列車を降り、經理将校より米や調味料等の食料や給料の配給を受けておりましたところ五十三期の伊藤少佐が拳銃自殺をされ、甲うひまなく悲しい気分^{カク}で鉄路沿いに出発しました。たしか三泊（野営）四日の鉄路行軍で、泥川の河原で野営し飯盒炊きをしました。横道^{オツラガシ}河子付近では戦闘のあとが残っており、軍馬の死骸があり悲惨なものでした。やがて海林弾薬庫に到着、速やかに弾薬を搬出し、草わらを敷いて休むよとの事でした。運び終えて一服したところ突然近くの弾薬庫が爆発し、直ちに伏せましたが、爆風が物すごく、もう終わりかと覚悟しましたが、やがて終息し、第二回目の命拾いをしました。すぐソ連空軍機が偵察飛行をしております。たしかこの海林での生活は九月初旬までで牡丹江

通信連隊に転進いたしました。弾薬庫の干草の生活からやっと人並みの元通信部隊宿舎の生活を十一月初旬まで過ごしました。ドラム缶を活用し、浴槽にして入浴ができました。暇があれば近くの川辺に行って満人より饅頭を買い入れました。同期の一人が脱走し民団生活者の中にうまく入って抑留されずに帰国したらしい。何もすることもないのでできるだけ舎内の散歩をしました。

シベリア抑留地への旅

十一月に入り「ダモイトウキョウ」の話が出てきて、十一月六日、牡丹江駅に集合せよとの声で、いよいよダモイと喜んで駅に向かった。引込線では有蓋貨車が三十両ほど連結した列車があり、三十人が頭足交互に二段装置の板張りの上を窮屈な姿勢で過ごした。真ん中の扉の内にベチカを置き、トイレがその横にあったように思う。スコローダモイ（急いで帰還）の声にだまされて夜の暗闇の中を密室の有蓋貨車は東へ東へと進むが、途中（ウオロシロフ？）で西の方向に進んでいるらしいと羅針盤を持っている人の声を聞

き、嫌な気持ちで眠ることもできない。随分走って行ったが停車の音で目を覚まし、ドアを開けた人が「海が見える。ウラジオではないか」と叫んだが、ウスリー江（松花江シホカコウの下流）であることが分かった。ハパロフスクの大都市の看板が散見され、いよいよ白樺林の中に連行され、ポーランド将校がカチンの森で銃殺されたようになるのではないかと誰からとなく話し合い、悲観の極に達したが、飯上げの声で燕麦のカーシヤの配給があり生き残った気持ちになる。

長い停車のあと、やがて列車は汽笛一声出発し、永い永い旅の始まりとなった。シベリアの大地は雪に閉ざされ森も川も銀世界の中を列車は西へ西へとひた走る。途中で一日停車する事もあったが、あまりかゆいので上衣の中を見るとシラムの卵が白々とびっしりついていた。窓を開けて氷結させれば死ぬだろうと思ったが、寒気には強く駄目である事が分かった。イルクーツクを過ぎ、バイカル湖を右に見て白銀の広野を西へ西へと列車は行く。出発から二週間くらいたった頃、大工業都市で三日ほど停車した。そこで消毒と

バスに入れるとのことで喜び勇んでバーニヤ（浴場）へと急いだ。衣類は全部金具に入れ熱気消毒でシラムを殺し、大きな蒸気入浴棟（サウナ）でシャワーを浴び、積もったあかを落とした。約一カ月にわたるシベリア横断八千キロの旅の中で一番印象に残る一時でありました。

ラーゲル生活ラーダ收容所

ウラル山脈を越え西シベリアの広野を過ぎて、十二月初旬モスクワ南方四〇〇キロのウクラナイナに近いラーダ收容所に到着した。白銀の雪原の白樺林の中に点在する洞窟兵舎に分散收容され、真ん中の通路を挟んで二段ベッドが並列されていたが、早速南京虫の襲撃には閉口した。白樺の皮で点火し次々と焼き払った。酷寒の中での早朝点呼には、吹雪の中で全員点呼が済むまで凍えながら辛抱した。ペチカに使う用材は近くの雪中の森林に入り朽木を中心に取りまとめ、二人で運搬を繰り返したものです。雪が解け、早春の野道を通りタンポフに通ずる道路工事業に従事しましたが、その帰途野草を採取してビタミンCの補給をし

た。ゲルマンを中心に多数の外人抑留者がいたが、逐次どこかへ転進していった。

七月下旬ラーゲルの移動が現実化、タタール州エラブカに転進することになり、ラーダ駅を出発し、キズネール駅に到着した。二泊三日の行軍にてエラブカAラーゲルに入った。七月三十日頃と記憶しています。

ラーゲル生活エラブカ収容所

収容所の近くに金のクルスの寺院が糧秣倉庫になっており、主として野菜関係の管理を担当したゲルマン二人がマネージャーとしており、友人と三人で野菜の整理作業をやっていた。休憩時間にゲルマンの教えでジャガイモとニンジンをストックでふかし、皮をむいて鍋に入れ、木づちでつくとジャガイモ餅ができました。余分に作り飯盒に入れて所内の友人に差し入れたものです。

一番重労働だったのが吹雪の中の原木運搬だった。吹雪の中を早朝に出発し、雪そりを八人が馬の代わりに原木一屯を約一六キロの伐採集積地より夕方頃までに運搬した。前曳き六人と後押し棒で後押しと舵取り

するもの二人で、坂道はエンヤサコロサのかけ声で運搬した。のどが渇くとききれいな雪を食べてのどを潤していた。

近くのソホーズの小麦収穫作業に泊り込みで出掛けた。雪の降る中、手袋もなく素手で収穫をやれとの事、辛抱を重ねて作業をしたが、つらかった。宿舎に帰りトルコ蒸気浴をして眠ったが、隊長幹部が協議し、無茶なラポータ(労働)を拒否することになり、翌朝は宿舎を出ず指示を待った。交渉の結果、手袋と鎌を準備するとの事でようやく腰を上げノルマを達成した。

昭和二十二年五月初旬、腸チフス患者が大量発生し大騒動となる。私もちょうど熱発していたため真性ではなく疑似患者として入院を余儀なくされた。真性患者がだんだん亡くなっていくのが大変悲しかった。たしか回復期には稀硫酸を飲まされてガスを出した事を覚えている(回復の印らしい)。翌年三月頃にも腸チフス患者が発生したため、前回のカルテのある者は入院させられたが、今回は死亡者もなく、やがて終息し

た。

カマ河の結水るとき、泥炭運搬は苦痛であった。五月過ぎになるとカマ河の水が解けるときのガラガラという大音響は耳の奥に残っている。また軽爆撃機による爆弾で水を破碎する光景は珍しいものであり、印象に残っている。三國浄春師のもとに同志が集まり、「般若心経」講義に熱中し、短歌俳句の習いもあった。

ダモイ―その後―

昭和二十二年十月五日、帰国名簿が発表され、約千五百人単位にて第一梯団より第四梯団までが今年中に帰還したが、日本海結水のためその後は来年回しとなる。もう一冬越年と悲しみ乗り越えて辛抱する。

翌年六月、第五梯団が出発した。我々の第六梯団もいよいよダモイの機が熟した。七月二日、懐かしのエラブカ埠頭にて乗船、カマ河を下りカザンに到着した。カザンにて暫く休養の後、初旬後半にナホトカに向け有蓋貨車に乗せられて、七月二十八日にナホトカに到着した。約三週間の旅も「帰心矢の如し」のため記憶に残っていない。ナホトカでは出港予定がわから

ず静穏に日を過ごしたが、ようやく八月十日岸壁に横づけされた「遠州丸」に乗船した。栈橋を一步一步踏み締めて、三年間の苦悩を捨てきって船室に飛び込んだ。

船長、機関長以下全員日本人、人も船も全部日本のもので、これほど安心できることは他にはなかった。そして、やれやれ本当にダモイでできるんだと船室にくつろいでいたら、遠州丸の機関長である同郷の森田勲氏が私の住所氏名を確認され、私の目の前に見える「宇平博さんですか。私は安楽の西の方に住んでいる森田です。三年間大変だったでしょう。どうぞ私の室に御案内します」と言われ、この上もなく嬉しかった。同室の浜口楨祐氏と共に機関長室でごちそうになり、またバスで入浴し、三年越しのあかをとりました。ダモイの喜びに加速して森田氏の御接待には万感迫るものがありました。かくして三年間夢に見た故郷日本の山々が見えたときの感激は、一生忘れ得ないものでした。八月十二日、遠州丸はわれわれの夢をのせて山紫水明の帰還港舞鶴に到着した。

舞鶴引揚館では全身DDTの防疫消毒、大浴場での入浴、尾頭付きの夕食、婦人会の方々の歓迎と湯茶の接待と、感謝感激の三日間でした。

復員手当も六百円也受領しました。渡満以来三年一カ月強の強制抑留の永い永い旅でした。昭和二十三年八月十五日舞鶴駅を出発、京都駅で父が出迎えに来てくれました。家では母弟妹が首を長くして待っていました。ささやかな帰国祝いのパーティーをしてくれました。三年間の辛苦生活のため栄養失調で、堅いものは受け付けませんでした。せつかくの村松の浜口さんのお誘いで釣り舟に乗せてもらったのはよかったです。途中で舟酔い症状を呈し失礼をいたしました。その後、エラブカ組の松岡敬三氏の御好意に甘え、昭和二十五年十二月から昭和五十年六月まで松岡氏の経営する遊技場、レストラン、キャバレー、料理旅館、ホテル等の支配人として勤務しました。途中、昭和三十四年頃から昭和四十二年まで真珠養殖（長崎県五島列島）の事業に没頭しました。真珠養殖不況のため加工販売に転進、真珠貴金属宝石の専門店として全

国有名百貨店等の取引を行い、奮闘いたしました。一応事業体系の整備完了のため退職し、昭和五十年八月頃より平成二（一九九〇）年六月まで（協）津市専門店会専務理事として十五年間勤務し無事定年退職し、晴耕雨読の悠々自適の生活を送っております。

マルシャンスク抑留記

三重県 林 英夫

はじめに

財団法人全国強制抑留者協会の三重県支部が今春おくれげせながら設立された機会に、抑留中の記事投稿の依頼を受けました。マルシャンスク収容所については、タンポフ・ラーダとともに抑留関係者による慰霊遺骨収集記事を含む幾多の報告があります。以下の拙文は、帰国復員以来既に五十有余年、薄れた記憶を掘り起こしつつ記述したものであります。不備不足の点、悪しからずご了承ください。